今月の読み物

「見たり、聞いたり、探ったり」No.262

通算 No.413

青　木　行　雄

2021年（令和３）米野球MVPに輝く（11月28日発表）
「大谷翔平（おおたにしょうへい）」という「世界のヒーロー」

2021年（令和３）、メジャーで最も権威があるMVPを満場一致で受賞した。

シーズンの最後まで熾烈（しれつ）なホームラン王争いを繰り広げ、投手としても９勝し、投打に大活躍を見せた「大谷翔平」。オールスターゲームでは従来のルールさえ変更させ、１番・DH兼先発投手として「リアル二刀流」を魅せてくれた。

華々しい活躍でメジャーリーグの話題をほぼ独り占めして、７年ぶり、16人目となる「コミッショナー特別表彰（MLBで歴史的偉業の達成や功績を残した人に贈られる賞）」の受賞、選手会が主催で現役選手の投票で選ぶ「プレイヤーズ・チョイス・アワード」では両リーグの「年間最優秀選手賞」と「ア・リーグ最優秀野手賞」のダブル受賞、各球団の監督やコーチの投票で最も優れた打者に贈られる「シルバースラッガー賞」の受賞、米スポーツ専門各メディアが選ぶ「年間最優秀選手」も受賞した大谷だから、今回のアメリカンリーグMVP受賞は当然と言えば当然といえる。全米野球記者協会の代表30人によって選出されるMVP。大谷は30人全員の１位票を獲得。満票でのMVP受賞である。ア・リーグでの満票選出は2014年のマイク・トラウト以来の７年ぶり、さらには同一シーズンでの主要５部門受賞はMLB史上初の快挙であり、これこそが大ヒーローであり、スーパーマンといえる実力である。

日本人としては、首位打者と盗塁王の２部門を獲得した2001年（平成13）のイチロー以来の快挙であった。又、「プレイヤーズ・チョイス・アワード」の年間最優秀選手賞をも同時受賞したのは大谷が日本人では初となった。まさに歴史的偉業なのである。

大谷翔平は2016年（平成28）、日本のプロ野球時代にも日本ハムでチームのリーグ優勝と日本一に貢献し、パ・リーグ最優秀選手（MVP）を初受賞した経験がある。しかしながら、一概にMVPといっても、ほとんどがリーグ優勝チームから選出される日本プロ野球のMVPとは意味合いが違う。その価値にも大きな違いがあるといえる。

メジャーリーグのMVPはアメリカン・リー

栗山英樹氏は翔平が日本ハムファイターズに入団した時の監督であり、恩師である。

グとナショナル・リーグからひとりずつが選ばれるが、所属チームの成績やポストシーズンでの成績には左右されるものではない。ベースボールを文化の象徴として位置付けるアメリカにおいて、シーズン中に敵・味方関係なく、ファンを熱狂させ、ベースボールを通じてアメリカを盛り上げた選手に贈られる賞こそが、メジャーのMVPである。だからこそ選手誰もが夢見る憧れのタイトルになっている。翔平はほんとうにすばらしいスーパーマンだ。

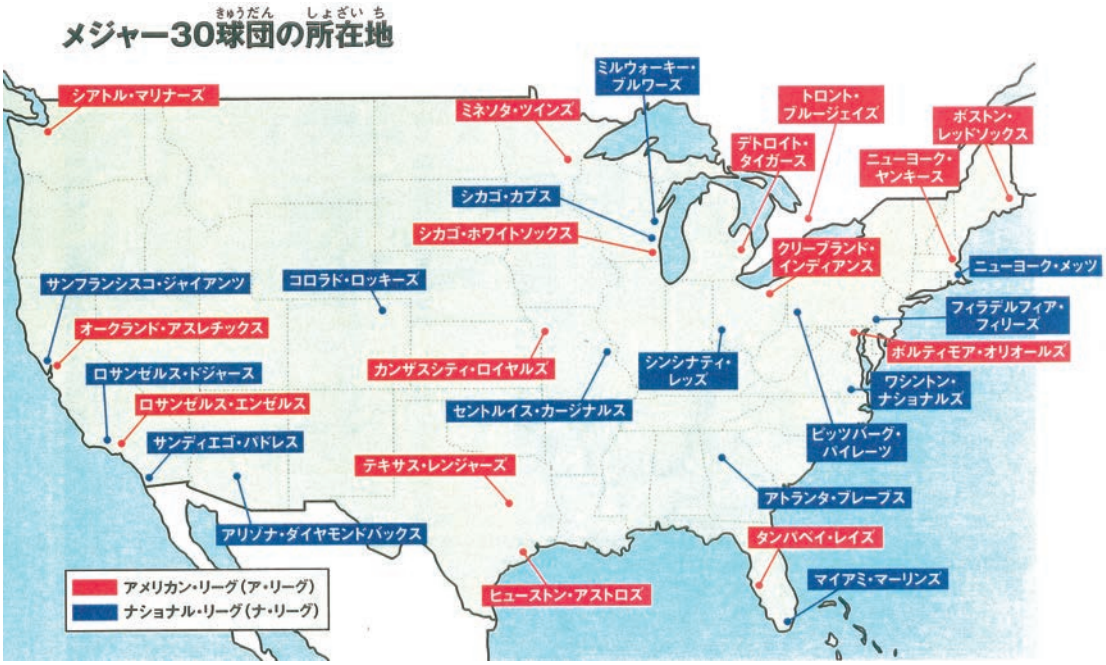
2021年（令和３）主要５部門の受賞

① アメリカン・リーグMVP
② シルバースラッガー賞（DH部門）
③ コミッショナー特別表彰
　選手間投票での
④ プレイヤー・オブ・ザ・イヤー（年間最優秀選手賞）
⑤ アメリカン・リーグ最優秀選手賞

※ アメリカにはメジャー30球団がある。

① アメリカン・リーグ（ア・リーグ）15球団
② ナショナル・リーグ（ナ・リーグ）15球団

大谷選手が活躍しているチーム
ア・リーグの「ロサンゼルス・エンゼルス」



アメリカメジャー、30球団の所在地の地図

大谷翔平（おおたにしょうへい）の誕生

リトルリーグの試合、当時13歳

リトルリーグの頃の大谷翔平、中学生の頃
120㎞の球速であったという13歳

翔平は1994年（平成６）７月５日、岩手県奥州市で大谷家の末っ子として生まれた。父親の徹（とおる）氏は、高校生時代岩手の強豪、県立黒沢尻工業高校野球部に在籍し、高校卒業後はプロ野球選手を数多く輩出している名門、三菱重工横浜の野球部の出身。母親も高校時代は神奈川県代表としてインターハイにまで出場したバトミントンの選手で、三菱重工横浜の実業団チームでプレイしている。大谷の７歳年上の長男は現在も社会人野球の選手、２歳上の姉はバレーボールの選手というアスリート家で育った。

翔平が野球を始めたのは小学生になる前からである。父徹は翔平が小学校時代に所属したチームでは監督として、中学のリトルリーグ時代はコーチを務め､翔平を直接指導していた｡翔平が左打者になったのも自らが左打ちだった父の指導によると言われる。

投打ともチームメイトの何倍も練習を重ねていた翔平は、小学生の頃からライトオーバーのフェンス超え、先にある一級河川の胆沢川に特大ホームランを何本も打ち込んでいたという。投手としてマウンドに立ってもその投げぶりは際立っていた。中学に入学した頃でその球速は、120キロを超え、リトルリーグ時代の東北大会決勝戦では強豪相手に多数の三振を記録した。中学３年の時すでに身長190センチ近くあったという。

父、徹氏の指導は野球の基本的な心構えなど野球に対する姿勢をおしえた。

※いつも大きな声を出してプレイする

※どんなときも全力疾走する

※キャッチボールを一生懸命に練習する、等々

このような基本的な対処する心構えなどを多岐に渡り指導してきたという。

翔平が日本ハム時代もメジャー移籍後もいつも変らぬ姿勢である。MLBを代表するサンフランシスコ・ジャイアンツの名選手、ポージーは大谷のことを「リトルリーグで全力プレイする12歳がそのまま大人になったようだ」と称賛（しょうさん）したと書かれていた。

大谷翔平はいつでも、どんなゴロでも一塁まで全力疾走、スター選手になった今でも、手を抜くようなうぬぼれたプレイは一切なく、いつも謙虚で野球を愛しているのがよくわかる全力プレイ、見ていて、

ほれぼれする。

愛される、全世界のヒーロー

2021年（令和３）2020年の新年から、たちまち全世界に蔓延した「新型コロナウイルス」もまる２年、世界を震撼させ続けている中、不安で暗い世の中に、メジャーで最も権威あるMVPや５部門の受賞を１手に掌握する、日本人、首相の名前は知らぬとも、「大谷翔平」の名は世界に広まった。

大谷翔平のスーツ姿である

日本のプロ球団はセ・パリーグ合わせて、12チームあるが、アメリカのメジャーリーグ、所属球団数は30チームある。地図のように桁違いに広いアメリカの各地に点在する。遠征するにも一苦労である。大谷翔平が所属するエンゼルスが、ヤンキースのあるニューヨークに遠征すると飛行機で往路約５時間、復路は気流の影響もあり約６時間もかかる。これだけ広いと当然時差もあるし、気候も違う、ロサンゼルスでは初夏を感じる春先でもミネソタでは寒冷で雪が舞っているということもたびたびだときく、こんな過酷ともいえる遠征を繰り返しながら、162試合を戦い抜くのがメジャー選手の実体である。そんな強固な肉体と強いメンタルを持つメジャーの選手達さえも今季の大谷ほど連続で試合に出続けることは難しいといわれていた。いかに大谷がメンタルと肉体に優れた選手であるかが証明される結果となった、すごいことである。

シーズンを通してメジャーリーグでトップクラスの成績を維持することは並大抵のことではない。しかも大谷翔平は「リアル二刀流」である。サイ・ヤング賞に３度も輝いているドジャースのカーショウは「次の登板に合わせて、どれだけ準備をしなければいけないか僕は理解している。加えて大谷は打撃練習もするわけで……。有り得ないよ。」と舌を巻く、と称賛した。

エンゼルスでの練習風景

しかし、メジャーの選手が大谷に魅了されるのは、160キロの球を投げ、特大のホームランを何本も打ち、連続で試合に出続けていたからだけではない。大谷と接した選手たちは、高い野球能力だけではなく、その礼儀正しさや謙虚さ、そして柔軟な人間性をも称賛する。今や敵地でもスタンディング・オベーションで迎えられる全米のスーパースターになったというのに相変わらずグラウンドに一礼し、バッターボックスに入るときも球審と相手キャッチャーに会釈する。好調、不調に関係なく、塁に出れば人懐（ひとなつ）っこい笑顔で相手選手とちょっとした会話をし、デッドボールを与えたときも相手への謝罪

を欠かさない。日米の野球文化の違いがあるとはいえ、デッドボールで謝罪するピッチャーを見ることなど、多くのアメリカ人にとって初めての経験だったようである。また、グランドのゴミを何事もなかったように自分のポケットに入れ、試合後もファンに呼び止められれば、時間の許す限りサインに応じる大谷である。こんな大谷だからこそ、オールスターゲームで大谷の周りにメジャーを代表する選手たちが自然と集まるようで、全米のファンからも称賛の声が止まらないのだと思う。

ホームラン王争いが佳境（かきょう）となったシーズン終盤、相手チームから徹底したマークにあい、フォームを崩しそうになったときでさえ、大谷はこうした姿勢を変えることがなかったといわれる。

2021年（令和３）11月15日の帰国記者会見で、「最後のほうはメジャーでも一番精神的にきつかった。落ち込んだこともありましたが、普通の生活では味わえないことを経験させてもらっているのはうれしい。試合に出られるからこそ、こういうことがある。落ち込むことも含めて、いい一年だったと思います」と話した。

ロサンゼルス・エンゼルスのジョーマドン監督が大谷翔平のこの一年を振り返り、このような印象をこうのべた。

「シーズン終了から時間がたつほどに感慨が深まっている。大リーグはこれまで、彼が今年やってのけたことに近づくことさえできなかった。この偉業に肩を並べ、超える選手がいるとしたらそれは彼自身だろう。翔平はア・リーグだけでなく、メジャー全体のMVPだ。

来季はさらに成績を伸ばせる。今年の我がチームは故障者が多く、彼をあまり援護できなかった。一緒に打線を引っ張るはずのトラウト、レンドンらが不在で、彼にマークが集中した。周囲をレギュラーキャストで固めることができれば来年は50本塁打も可能だ。今季９勝の投手成績も同様で、十分な援護が得られれば簡単に10勝以上できていたはずだ。

メジャーでのバッターボックスに立つ翔平の姿

メジャーでの打席、いまにも打とうとしている所

メジャーでのフルスイング、長身の大谷の打撃姿

ホームランを打ち、投手も審判もキャッチャーも、本人も見あげる様子が見える

投打もベースランニングも素晴らしいが、人間性も優れたスキルの一つ。彼は決してイライラしない。いつも穏やかで、周囲に対する敬意に満ちている。

私が特に好んでいるのは、本塁打を打った時の振る舞いだ。最近の大リーグには大きなアクションやデモンストレーションをする選手が多いが、彼はとても上品なやり方をする。大げさなことをしたくない、ただ自分の仕事をしたいと思っているだけだろうが、その謙虚さがとても印象的だ。

打者として毎試合に出て、週に一度マウンドで投げるのはタフなことだが、彼はそんな毎日を楽しむ能力があるようだ、ナイターの試合後も、ロッカールームにある小さなビリヤード台で夜中の１時頃まで水原や同僚のフレッチャー、バターフィールドコーチらとゲームを楽しんでいる姿を見る。球場に来て、ユニフォームを着ることを楽しめずに燃え尽きてしまう選手もいるが彼にその心配はない。

英語もどんどん上達し、ユーモアのセンスもあるから、クラブハウスでも屈指の人気者だった。優れた野球人であり、素晴らしい人柄だからこそ、みんな、彼と一緒にいるのが楽しくて仕方がないんだ」

以上がジョー・マドン監督が読売新聞のインタビューに応じた文面である。

大谷翔平が今季の二刀流で築いた偉業

打者では

①　155試合、②　打率0.257、③　本塁打46本

④　打点100、⑤　得点103、⑥　盗塁26

⑦　三塁打８本、⑧　二塁打26本

投手として

①　登板23回、②　勝９回、③　敗２回

④　防御率3.18、⑤　投球回130⅓、⑥　奪三振156回

全世界を震撼させている新型コロナウイルス蔓延中の最中、この活躍は日本人を始め世界の人々に、そして青少年達に夢と希望をもたらした大谷翔平に万感の称賛を送り、今期の活躍に又大いに期待する、怪我など十分気をつけられ、又々今期も「MVP」の頂点を目指してほしい。

2021年12月19日記

参考資料

ベースボールヒーロー(株)宝島社

読売新聞

産経新聞

NHKテレビ